

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻59号 平成20年10月1日発行

「修身教授録」探求（第二十八回） 十二 自然の営み

森 信 三

最近急に寒くなりまして、この教室でも窓の硝子戸が殆ど閉め通しになっていきますからつい気付かずにはいましたが、先程もここから一寸外をのぞいてみますと、何時の間にもやらもう窓の外には早咲きの山茶花が咲き盛っていますし、又その側には晩咲きの白山茶花の蕾みがもうすっかりふくらんで今にも開こうとしています。

私はこの様子を見ると同時に、一種言い知れない深い感じに打たれた事でありませぬ。と申しますのは、私ども人間の間には怠けるという事がありますが、大自然たる天然の営みにはいささかの怠りもないという事でありませぬ。すなわち私ども人間の眼には或は映らない時があるかも知れませんが、天の営みは、こうしてお話をしていられる間にも黙々の裡に行われているのであります。

さらにまたこのことは、先ほども農業の塚本先生が菊の鉢植えを片づけておいでになる処を側から拝見して感じたことであり

ます。すなわちそこにはすでに明年の菊の若芽が、その根の方には何時となく兆し始めているのです。すなわち今年の花の盛りの終わったところ、そこには早くも明年の営みが兆しつつあるのであります。私どもは平素とかく人間界の難事へのみ心を奪われて、天地大自然の営みがいかに用心深く不断に行われつつあるかということ、平素は一向に気づかないのであります。しかしながら時折極く稀にはあります。只今申した様な場合に出逢いますと、今夏のように大自然の営みの偉大さに驚かされるのであります。実際只今の山茶花にしろ菊にしろ、否かかいう私ども自身さえ、その何れもが大自然の所産であり天然の営みの現れであります。それ故私どもはただ単に山茶花や菊に於ける天然の営みにのみ心を向けていないで、かくいう私ども自身がそれらにも勝って天然の大きい生命を享けて生れ出ていることを反省するところがなくてはならぬでありませぬ。

然らば私どもと山茶花や菊は、その何れもが等しく天地の生命を享けて生れ出でつつ、そこに如何なる相違があるのでありませうか。思うにそれは結局心の問題とい

うの外ないでありましょう。すなわち山茶花や菊には心がないのに、我々人間には、心の働きというものが生れながらに与えられているという事実であります。勿論哲学的に申せば、動植物にもそれぞれの程度の極微な心があるとも言えない事はないでしょう。しかし仮にかかる種類の心があつたと致しましても、これを私ども人間の心に比べますれば、現実には統局有るも無きに等しい程度のものでありましょう。かくして私ども人間が植物と異なる所以は、結局は心の有無、更には精神の有無というべきでありましょう。

ところが斯様に考えて参りますと、ここに一つの問題が出て来るのであります。それは植物は我々人間の様に心が無いにも拘わらず、年中その天然の営みを中絶する時とてないのに、心を持てる私ども人間の方に、却つて努める時と怠る時、張る時と弛む時とがあるのは、そもそも如何なる訳でありますでしょうか。これお互に深く考えて見なければならぬことではないでしょうか。さて心を持てる我々人間に却つて弛み怠る時があるという事は、一寸考えますと如何にも不合理なようでありますが、事実

は必しもそうとは言えません。そもそも人間の心というものは、一方からは一心よく天地の心にも通じ、更には神の心にすら通うとも言えるのでありますが、同時に一步を誤れば心は実に曲者くせもの魔者であつて、常にあらぬ方へとさまよい易いものであります。これに反して山茶花や菊などというのは、自己に与えられたるものに安心して、決して迷うとか怠るということがないであります。すなわち自己に与えられた物以外を欲しないのであります。例えば山茶花は、その植えられた場所が悪いからとて、決してあちこちと新たな場所を求めて動き廻るといふことはありません。又菊は自己に与えられた肥料が不十分だといって、決して自ら養分を探し求めてその辺をほつき廻るといふことにはないでしょう。これ植物が時来たれば必ず花を開き、時来れば必ず実を結ぶ所以であります。すなわち意識を持たない無心の植物は、無心なるが故に却つて分不相の望も抱かなければ、又人の思わくによつて自己のなすべき営みを怠るといふこともないのであります。かくして深山の桜は訪う人も無きに、時来たれば必ずその花を開くのであつて、人の見

る見ないという事によつて自己の営みに弛張勤惰ちやうきんたはないのであります。然るに私共人間は、なまじいに心の働きあるが故にかく人のことが気になり、外の物に眼が散りやすいのであります。そうしてその結果自然とわが為すべき務をも怠ることになる訳です。

然らば大自然は何故に私ども人間にかよふな心の働きを授けられたのでありましようか。もし人間に心の働きあることが、ただ我々人間を迷わし怠らせるだけであるならば、おそらく神は斯様なものを我々人間に授けられはしなかつたでありましよう。では私ども人間の心の真の相は如何にあるべきでありましようか。それは只自己のなすべき営みを、かの動植物に於けるが如くにただ無意識に謂はば機械的に営む許りではなく、自らの為すべき事を自覚的に意識して、その深い意味を知りつつ履み行わんが為であります。成程動植物に迷いはありません。これ動植物に勤惰なき所以であります。しかしながら同時に又それは自覚に出づるものでありませんから、近頃は非常に勉強し出したという事もない訳です。今年はこの庭の菊の出来が良かったと

いいまでも、それは菊自身の自覚的努力によるものでなくして、実に菊作りたる人間自身の努力による事であります。すなわちその行届いた手入れの結果に過ぎない訳です。かくして植物の出来映えのよしあしは、畢竟これに対して尽くす人間の心の弛張淺深の現われに外ならない訳であります。

斯様に考えて参りますと、私どもは、ここに人間としての生を享けて心を与えられた事を、何よりも先ず感謝しなければならぬでありましょう。同時に又その事の本意を知って、心をその正しさにおいて生かさなければならぬでありましょう。すなわち神は我々人間を迷わしめんが為に心を授け給うたのではなく、動植物には見られない自覚の光に照らして自らの道を知り、その日々の務を営ましめんが為めでありましょう。心の働きを与えられたということは、すなわち又自由を与えられたということとであり、自由を与えられたということは、又それに対する責任を負わされたものと言わなければなりません。動植物の営みは、そこになまじいの意識がないだけに、少くとも型としては、却つてもすれば怠り勝

ちなる私どもにとつて大なる教訓となるとも言えましょう。実際私どもは静かに大自然の営みを観ずる時、そこに秘められたる神の御旨を汲む事が出来るとも言えるであります。 (大林カネ記)

（修身教授録」第四巻同志同行社昭和15年刊）

森信三先生の短文紹介

前号で紹介した論文「第二の夜明け」の続きを紹介する。

論文 第二の夜明け（続き）

森信三

三、内なる変革

民族の生命の危険は感じつつも竟にこれに乗り切ることのできた明治維新の変革は、当時日本の置かれていた境位の必然として「外」に向かつて開かれた「変革」であったが、一応西洋文化の皮相を模し得て東西の文化を融合し得たりと錯覚しつつ、竟にその虚しき誇負につまずき敗れたることを契機として行われる今回の変革は、その境位の必然として、また実に「内」に向かう「変革」でもある。ここに今回の変革を「第二の夜明け」としまたこれを「内からの変革」と言つた所以がある。「内からの変革」と「内に向かう変革」とは単に言葉の皮相からは正逆の矛盾を犯すようであるが、その本質においては全く同一のものと云わねばならぬ。けだし「内からの変革」とは結果の外形に即して言い、「内に向かう変革」とは変革の志向と態度に即して言うにほかならないからである。而してこれらの両相に通

ずる「内なるもの」に今回の変革の本質は存すると言われるべきである。

確かに明治維新は「外」に向かつて開かれた変革であった。我々は世界史上類例を見ないその永き自己封鎖の扉を開いてそこに無量の珍奇なるものに瞠目したのであった。したがって明治維新の変革は「外なる物」への「まなび」とその模倣輸入とに奔命したのであった。明治期の日本はしかしそうした外来事物の模写的移入によつても済んだのであり、我々はそれらの模写的移入品によつて、国の危険を除去することも出来たのであった。

しかるにこの「外なる物」への学びは十分に「内なる物」によつて裏づけられはしなかつた。成るほど我々は西洋の哲学倫理芸術等を輸入することによつて「内なる物」をも撰取し得たと考えていた。しかもそれがそうでなかつたことは今回が敗戦によつて、完膚なきまでに露呈せられたのである。否それはまったく悲痛感すらも破碎し終わる徹底性をもつものであった。我々は今にして初めて「内なるもの」の裏付けなき単なる異なる「外なるもの」の移入の如何に愚かしかつたか悟つたのである。

しかし我々が単に「外なるもの」の移入に奔命して、その裏付けとしての「内なる物」を閉却したことは決して偶然と言われぬ。何となれば我々は「内なる物」は我々自身のものをもつて十分とし、ただ「外なるもの」さえ移入すれば十分だと考えていたからである。そこには我々の民族に特有な「浅薄さ」のあったことは、もとより言うまでもないが、同時にそこにはそれらのみに留まらないより深い根源のあることを知らねばならない。そしてそれは我々の民族がその生活環境として

の島国的限定の歴史的所産としての「素朴なる単純性」さらには「素朴なる無知」に根ざす「独善主義」である。私はこの二つの言葉を無意識に用いているのではない。それは私が私自身の今日までの歩みを反省することによって自らの姿の上に見いだした痛ましき根本性格であるとともに、また程度の差は無量であるとしても、極めて少数の例外を除いては、国民の大部分がそれより免れ得ない民族の宿命的制約と思われる。

しからばかくの如き宿命的なる根本制約は何によって生じたのであろうか。これを外的環境的条件に即して言えば、前にも述べたように有史以来の生活環境たるこの島国的限定によるという外ないであろう。しからば一歩を進めてこれを民族生命の内的規定のうちに求めたいかがであろうか。その時我々はわが民族が生命展開の縦の系列を重視し来たったその基本性格に求めるのほかないと思う。わが民族の根本病弊であり、かつまた今回の敗因の最大原因としての「素朴なる無知」に基づく「独善」が、民族の世界観人生観に固有するこの特質に基因するということに対しては、不賛の意を表明せられる向きも少なくないであろう。かかる人々はそれを単に外的環境的条件としての島国的限定のみに帰せめようとするであろう。私といえども単なる主観的情念としてはもとより同様である。しかも一度自省の内面光を向ける時我々は遺憾ながらその深因が結局民族の世界観人生観に基因するものであることを認めざるを得ないのである。

（「開頭」創刊号から昭和22年2月）

あとがき

「第二の夜明け」の残りの全部を紹介したかったが紙幅の関係でそれが出来ない。今回一部の論考で全てをコメントすることは差し控えるが、前号を読んで、読者から「原爆肯定論」という言辭はいかがなものか？というご意見をいただいた。このことについて申し述べてみると、勿論森信三先生は原爆投下の現実事実を肯定されているのみで、今後も原爆の使用をも肯定されたわけでもなく、核兵器そのものをも肯定された文章を拝読したことにはない。したがって「肯定」という言葉に固執すれば、これは不適切であった。改めてご指摘に感謝したい。

森信三先生は投下そのものを事実として直視しこれを先生の「最善観」に依ってお考えになられたものと思う。何となれば小誌第56号にて紹介した「微言」の最後に「終戦直後から今日この時に至るまで私の上に生起した一切の出来事は一つとして私にとって絶対必然的意義を持たぬものはない。『恩寵』というのはかかる体験的認識の宗教的表現なのである。」と述べられている。

このことは前号で紹介した永井隆氏の「原子爆弾合同葬弔辞」にも通じる立場かと思う。がしかし小生には未だどちらにもついていけないものを感じている。

原爆の惨禍を体験した日本人の姿勢として被爆の体験はこれを二度と地球上のどこかで再発させてはならないと考えれば、当時の米国の為政者の本心を検証しておく必要がある。このことで小生が今日まで知ったことは、米国が国家として行った（戦争）行為はこれであくまで自国の利益として、言葉を尽くしてその正当性を糊塗した米国の姿勢である。そ

してこれが当然未だに米国民の常識であるらしいのである。

一方被爆国民の立場からすると、この原爆投下はどう考えても瞬間大量虐殺の人類史上最悪の事件であつて、これを人類共通の体験課題として検証整理し、二度と再びかかる施策を実行に移す考えの再発を防止すべく、全地球人が学んでおかねばならないと思う。でなければ原爆の洗礼を受けた日本人の「いち」の代償は掻き消えてしまうのである。

（二繁）

HPは<http://web1.ken.jp/syusin/>

〒633-0003

桜井市朝倉台東二丁目五三八一八九

TEL・FAX 0744-451-3422

E-Mail: hiji@ken.jp

「かよう会」のご案内

日時 平成20年10月14日（火）
18時30分～
（毎月第三火曜日原則）
場所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』
「電話」（四ツ橋ビル 管理事務所）
06-6531-3686
交通 地下鉄：四つ橋線四ツ橋駅下車
2番出口へ。歩3分
「長堀鶴見緑線線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。
テキスト 森信三著「修身教授録」（致知出版）
2300円（大きな書店で購入）
10/14「真面目」
11/18「真面目」
12/16「教育と礼」
参加費 1000円